

いたシトロンがナチス軍に囲まれて銃撃戦の末に死亡したのは1944年10月15日のこと。また、宿敵だったゲシュタポのボス、ホフマン（クリスチャン・ベルケル）率いる多くのナチス兵に襲われる中、フラメンが青酸カリを飲んで自殺したのは同月18日だ。もっとも、連合軍のノルマンディー上陸は1944年6月6日だし、パリ解放は同年8月20日だから、2人とももう少し頑張っていれば・・・？

それはともかく、デンマークは『ハムレット』のみの国ではないことを、本作でしっかりと認識！

フラメンの姿に、思わず岡田以蔵を連想？

23歳で血気盛んなため敵を射殺することに何のためらいもないフラメンと、直接手を下すことに躊躇する繊細さのため当初は運転手役に徹していたシトロンは、ある意味でいいコンビ。さらに、彼らに暗殺の命令を下すレジスタンス組織のボスであるアクセル・ヴィンター（ピーター・ミュウギン）もいい仲間？そんな構図をみながら私が思わずフラメンとダブらせたのは、2010年の大河ドラマとして始まった『龍馬伝』でこれから登場してくるはずの人斬り以蔵こと岡田以蔵。彼に暗殺の命令を下すのは武市半平太。岡田以蔵は武市半平太の命令に忠実で、彼が命ずるままに反対勢力を次々と斬り殺していった。しかし、いつかその命令の是非に疑問をもつ日が到来するとしたら？

ボスの命令は絶対？そんな疑問が生まれると？

フラメンとシトロンが暗殺を目指すターゲットは当然憎きナチスドイツの情報機関関係者たちだが、ある日フラメンが暗殺の命令を受けたドイツ軍大佐ギルバート（ハンス・ツイッシュラー）と向かい合うと、こいつは意外にいい奴？なぜヴィンターはこんないい奴の暗殺を命令したの？さまざまな組織が乱立し真偽不明な情報が反乱する中、指揮命令系統が混乱したり誤った命令が出ることはいつの時代でもどの組織でもあることだが、いったんボスであるヴィンターへの疑問が頭をもたげ始めるとフラメンとシトロンの行動に狂いが生じ始めたのは当然だ。そこに、ある日知り合った、謎めいた年上の美女ケティ（ステイーネ・ステーンゲーズ）が絡まってくると、事態はややこしいことに。

そして、拳げうの果てにヴィンターは仲間を売った二重スパイはケティだと断定し、ヴィンターはフラメンに対してケティの殺害を命じたから、話は更にややこしくなっていく。さて、フラメンは誰を信じ、どのような行動をとればいいのかのだろうか？

ホフマンとの対決は？

デンマークにおけるドイツ秘密警察ゲシュタポのリーダーはホフマン。なのに、ヴィンターも主要なレジスタンスグループが組織化された「デンマーク自由評議会」もこのホフマンの暗殺指令を出さないのは一体なぜ？そこらあたりの虚々実々の駆け引きと緊迫感

本作をじっくり鑑賞しながら味わってもらいたい。私が意外にあっけないなと多少肩すかし気味だったのは、フラメン、シトロンらによるホフマン襲撃作戦のシーケンス。

数人の仲間とともにホフマンが入ったレストランに乱入し、ホフマンをあと一步というところまで追いつめたのに、なぜフラメンはホフマンを暗殺できなかったの？岡田以蔵は学問もなく忠実な飼犬のように武市半平太の命令に従っていたから、「問答無用」での一斬りが多かったようだが、その点ヨーロッパ流の知性と教養に溢れたドイツ人のナチス将校は当然口も達者？まさかギリギリの局面で対峙しているホフマンの弁舌にフラメンの決意がひるんだわけではないだろうが、なぜあそこでもう一步踏みこめなかったの？そこらあたりの微妙な心の機微は、あなたの目でしっかりと。

男は理想派？女は現実派？

ナチスドイツはフラメンの首に膨大な懸賞金をかけたが、フラメンの行動は大胆不敵で、今やホフマンの愛人になっている(?)ケティの前にも堂々と現れてくるからすごい。さて、ホフマンを暗殺するべくホフマンの車や道順を問いつめるフラメンに対するケティの回答は？また、フラメンからあからさまな質問はないものの、既にケティと激しい性交渉も交わした若いフラメンにしてみれば、「君が愛しているのは一体誰なんだ？」と尋ねたいのは当然。それを見透かすかのように、ケティは「私はホフマンなんか全然愛していない」「私が愛しているのはフラメンだけだ」「もしホフマン暗殺に成功したら一緒にスウェーデンに逃げよう」と提案したが、さてその本心は？

パンフレットにおける映画評論家渡辺祥子氏の解説は、「女にしてみれば彼も大事だけれど、なにより大切なのは自分の命を守り、いまを生き延びることだ。一人で生きている女なら誰もがそう思うはず。そのために選ぶ最善の道がフラメンを絶望に追いやったとしても、仕方ないこと。今は占領下、すべてが戦争だ」と、現実的な生きモノである女に対してかなり甘いが、さあ男のあなたはそんな評価を納得できる？シトロンの壮絶な銃撃戦の中での死亡はある意味でカッコいいと思えるが、何のなす術もないまま青酸カリをあおったフラメンの自殺は少し呆気なさ過ぎる。もしそれが、女の現実的な選択の結果起きたものだとすれば、私はそんな女の選択に全然納得できないが・・・。

複雑な政治情勢と抵抗運動の理解には、さらなる勉強を

日本はソ連と日ソ不可侵条約を締結していたにもかかわらず、日本の無条件降伏が近いとみたソ連は突如これを破棄して1945年8月8日樺太に南下・攻撃してきたことは歴史上有名な事実。それと同じように、デンマークはドイツと不可侵条約を締結していたが、これもいとも簡単に破られたらしい。もっとも、ドイツによるデンマーク統治の基本方針はデンマークの「保護占領」とされたため、民主的選挙で選ばれたデンマーク政府が存在していたらしいから、他の占領地とは大きく異なるもの。ただし、ドイツ占領下における

デンマーク政府がデンマーク国民によって民主的に選ばれた正当な政府であるかどうかは、アフガニスタンにおけるカルザイ政権がアフガニスタン国民によって民主的に選ばれた正当な政権であるかどうかと全く同じ論点。

また、デンマークにおけるドイツのそんな寛容さは、ドイツの戦局が悪化するにつれて次第に失われていったようだ。とりわけ 1941年6月22日のドイツ軍によるソ連侵攻を受けての、デンマーク共産党の非合法化、1943年2月のスターリングラードでのドイツ軍敗北を受けての、デンマークのいくつかの地方都市で激化するサボタージュに対する死刑やストライキ禁止等の処置を含む戒厳令の発令とデンマーク人による統治権の剥奪は大きな節目だった。さらに、ナチスドイツは1943年10月2日デンマーク内のすべてのユダヤ系市民を拘禁することを決定し、500人が強制収容所に送られたとのことだ。ナチスドイツの占領下では、フランスでもヴィシー政権とド・ゴール率いるレジスタンス組織に別れたように、デンマークでも親ナチス派の政権とレジスタンス組織に別れたのは当然だが、本作とそのパンフレットを読み勉強すれば全体像が少し明らかになってくる。単なる暗殺のための駒に過ぎないフラメンとシトロンのにはその全体的な位置づけは全くわからなかったはずだが、少なくともフラメンに対して懸賞金がかけられたことを通じて自分たちの行為が大きく注目されていることは感じていたはずだ。

「奴らは突然やってきた」とのナレーションから始まる1940年4月9日の出来事は、デンマーク（人）にとって永久に忘れられない汚点。したがってデンマークの王国公文書館が当時の資料を長い間公開せず、語ることを許さなかったのはある意味で当然かもしれないが、その史実を65年の時を経てデンマーク映画界を代表するオーレ・クリスチャン・マセン監督が映画化したことには大きな意義がある。その当時の複雑な政治情勢と抵抗運動の理解には、さらなる勉強が必要だが……。

原題どおりで良かったのでは？

本作の邦題は『誰がため』だが、原題は『FLAMMEN & CITRONEN』つまり、2人の主人公フラメンとシトロンの名前を並べただけ。ちなみに、1930年代の大恐慌時代のアメリカで大衆の人気を集めた銀行強盗であるボニーとクライドを主人公としたアメリカン・ニューシネマの代表作『俺たちに明日はない』（67年）の原題も『Bonnie & Clyde』。また、専業主婦のテルマと独身生活をエンジョイする女性ルイーズが鮮やかに自己解放を遂げていく弾けた面白いロードムービーが『テルマ&ルイーズ』（91年）だったが、その原題も『Thelma & Louise』。

デンマークの国民にはフラメンとシロンという名前は、今の日本における坂本龍馬や秋山好古・真之兄弟と同じくらいに有名。そうすると、邦題も『誰がため』という抽象的なものにせず、フラメンとシトロンの名前を覚えてもらうためにも、原題どおり『フラメンとシロン』で良かったのでは？

2010（平成22）年1月12日記